

日本女子大学の洋風寮“明桂寮”と生活改善同盟会の考え方

Housing Improvement Research Committee's Policy and Japan Women's University's Meikei-ryô Dormitory

住居学科 石田 雅美 薬袋 奈美子 関村 啓太
Dept. of Housing and architecture Masami Ishida Namiko Minai Keita Sekimura

抄 録 日本女子大学の創立者・成瀬仁蔵は、寄宿舎に対して強い思いを持っていたため、本学には多くの寮舎が建設された。1927（昭和2）年に建設され、現在も本学に残されている明桂寮は、メタンガス発生装置など建設当時の先端技術を使用した寮舎となっている。明桂寮が建設された数年前の1919（大正8）年には文部省主導で住宅の改善事項に関する調査を行うことを目的として住宅改善調査会が結成された。そこには、井上秀をはじめとした本学と関係ある人物が多数参加していた。そこで、本論文では、住宅改善調査会が明桂寮に与えた影響を探ることを目的とし、1920（大正9）年に住宅改善調査会が発表した「住宅改善の方針」6項目が明桂寮に当てはまるのかを整理した。その結果、住宅改善調査会の考えやそれに関わる人物の考えが明桂寮に大きな影響を与えていることが分かった。

キーワード：日本女子大学、学生寮、住宅改善の方針

Abstract Jinzo Naruse who established Japan Women's University (JWU) was a strong advocate of dormitory education, so many dormitories were built. Built in 1927 and still remaining in JWU's dormitories district, Meikei-ryô dormitory was a dormitory built using advanced technology at the time of construction such as reinforced concrete (RC), and had living rooms with beds installed, a kitchen facing South, and so on. In 1919 a few years before the construction of Meikei-ryô dormitory, the Housing Improvement Research Committee was formed to investigate housing improvement matters by the Ministry of Education. There were many members who worked at JWU, including Hide Inoue. In this paper, we explored how housing improvement affected Meikei-ryô dormitory, and analysed how Housing Improvement Policies were applied to construction of Meikei-ryô dormitory. As a result, we found that the new Housing Improvement Policy and the contributions of JWU employees influenced the design of Meikei-ryô dormitory.

Keywords: Japan Women's University, student dormitory, Housing Improvement Policy

1. はじめに

日本女子大学の創立者である成瀬仁蔵は、社会生活への関心を持たせる場所として寄宿舎を重視している¹⁾。成瀬は人格形成・社会経験・研究の3つのキーワードで寄宿舎を重視していたことが『実践倫理講和筆記』²⁾よりわかる。つまり、各自で寮のルールを決め、自ら規律ある生活を営むこと、学校で学んだことを寮の生活で日常生活に応用すること、学校の組織の中で、社会の小さい国家を経験すること、

そして、生活の場であるだけでなく、研究の一環になることである³⁾。図1⁴⁾に示したような創立当初に建設された寮では、成瀬の考えや当時の住宅改良が反映されている。具体的には、1つの寮には、20～30人が一緒に生活しており、そのような8つの寮が3棟に分かれて建設されていることである。また、明治期の住宅改良の考え方を反映した平面計画である中廊下式住宅⁵⁾で、図1の敷島寮（1901年建設）にみられるように居室は南向き、玄関の横に応接室があり、食堂等は北側という典型的な中廊下式住宅



『女子高等教育における学寮』より引用。(筆者加筆)

図1：創立当初の寮（敷島寮）

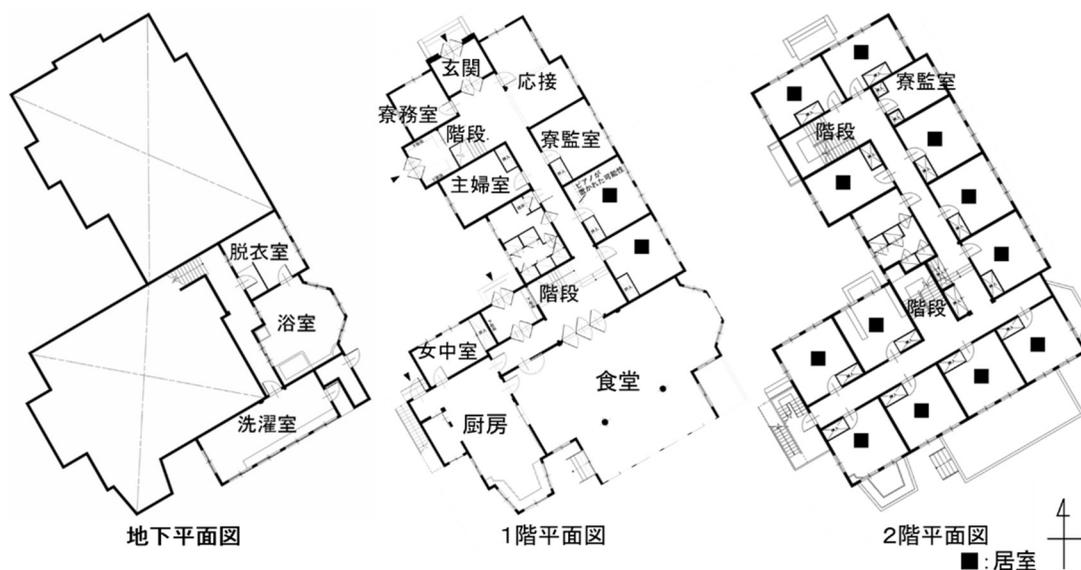
と同様の考え方に基づいている。しかし、洋風寮を望むなど成瀬の考えを十分反映できていなかった。

大正期の住宅改良運動については、木村徳国の研究が知られる。木村は住宅改良運動の基本的な事項を整理した⁶⁾。その後1990年代に入って、内田青蔵が『日本の近代住宅』⁷⁾をまとめ、我が国の戦前における中産階級の住宅の発生を明らかにした。同書は、

明治期からの住宅改良を踏まえて、大正期における、住宅改良の流れを社会的に追ったもので、住宅改良の位置づけを明らかにし、その意義を説いている。明治期における住宅改良運動は、近世にあった武家屋敷のような封建的な住宅から、プライバシーを重視するため、中廊下の採用や居間中心型の平面計画としてあらわれたという。一方、大正期においては、橋口信助が設立した住宅改良会や文部省主導の生活改善同盟会について分析し、洋風建築志向、不燃化の方向を示したとの認識を示している。

また、近年では、建築学と生活科学の中間的な視点から須崎文代が台所について研究をしており⁸⁾、「身体性」に着目して台所空間について整理している。台所における家事の観点から、住宅の改善について明らかにしている。伝統的な住まいでは、台所は北側に配置されることが多かったことを指摘し、明治後期以降研究がなされ、戦後に入ってから設備が整うようになったとしている。

本稿では、こういった研究の成果を踏まえ、日本女子大学の明桂寮における、大正期の住宅改良に一役を買った生活改善同盟会の影響を確かめる。研究は、生活改善同盟会の概要については文献より整理し、明桂寮については文献整理の他に成瀬記念館所蔵の当時の写真や図面を用いた考察を行う。



『佐藤功一による寮建築の研究』⁹⁾より転載。(3階は2階と同様。筆者加筆)

図2：明桂寮平面図

2. 明桂寮の概要

明桂寮は1927（昭和2）年に佐藤功一により建設された日本女子大学における最初の鉄筋コンクリート造（RC造）の寮舎である。1993（平成5）年以降、休寮となり、現在は、生活者はいない。構造は地下1階、地上3階建てである。図2に示すように1階には、南に面した厨房や食堂があり、居住空間としてふさわしい場であるといえる。つまり、大学敷地内に建設されているため学校建築ではあるが、住宅として考えて計画されていることがわかる。2階・3階は中廊下式でそれに面して、北東・南東には居室が並んでいる。寮内の使い方など時代によって部屋の数は異なるが、建設当時は24室の居室があった¹⁰⁾。1部屋の人数も年代により異なるが、建設当時は4名¹¹⁾、それ以降は2名～3名で生活していた。部屋は洋室であり、ベッドと机、椅子、棚が置かれている。これらの家具のしつらえ方の工夫により、個人のスペースが作られていた。開設から2年後には、メタンガス発生装置が設置されており、当時の先端技術を用いていたことがわかる。また、タゴールや満州国錦州省の教育視察団をはじめとした海外からの視察が来た際に、明桂寮の学生指導にあたる寮監が教育方針の説明¹²⁾をしており、寮の教育における位置づけは大きいと言える。

なお佐藤功一によって、予科教場と寮舎および、文理科大学本館の建築計画が1925（大正14）年頃に策定され、その第一期計画として予科教場（現在の樟溪館）と寮舎（現在の明桂寮）が実施設計に進んだようである¹³⁾。

3. 住宅改善調査会の考え方と明桂寮

3-1. 住宅改善調査会について

住宅改善調査会¹⁴⁾は、生活改善同盟会の中に置かれた住宅に関する調査会である。生活改善同盟会は、1919（大正8）年に開催された「生活改善展覧会」を契機に結成され、住宅や服装をはじめとして新年のあいさつなどの社交儀礼や食事などにおよぶ生活様式全般の改善事項に関する調査を行い、新しい生活改善の提案を行った影響力の大きい組織であった。1920（大正9）年には、「住宅改善の方針」¹⁵⁾（以下「方針」と略す）を発表した。

「方針」の作成には井上秀をはじめ、田邊淳吉、田村剛、今和次郎など日本女子大学で講義をしてい

た人物が4名参加していた。また、明桂寮の設計を行った佐藤功一の大学での同級生である佐野利器（委員長）、田邊淳吉（副委員長）、大熊喜邦が参加していた。日本女子大学での教育・研究の成果が、「方針」に反映され、また「方針」の内容に触発されて、新しい居住形態の実現をする可能性も高かったと考えられる。

また、井上秀の著書『最新家事提要』の中では、住宅の間取りについて、生活改善同盟会の説明を引き合いにしている¹⁶⁾。生活改善同盟会の考えを自らの著作で紹介しているため、強い影響を受けていることが推測できる。井上秀は、第4代校長（在任期間：1931-1946）であり、大学方針には、井上の考えが多く反映されていたであろう。つまり、明桂寮などに生活改善同盟会の考えを反映させていることと考えられる。

3-2. 明桂寮にみられる住宅改善の方針

住宅改善調査会が発表した「方針」では、6項目を挙げている¹⁷⁾。6項目とは、「起居方式を椅子座式にする」、「接客本位を家族本位とする」、「実用本位の庭園」、「衛生・防災を考慮する」、「家具の実用性を考慮する」、「共同住宅・田園都市の施設を奨励する」である。本章では、大正時代に文部省主導で行われた住宅改良が明桂寮に影響を与えたのか探るために6項目の方針が明桂寮に当てはまるのかを整理する。

（1）椅子座式

「方針」では、床座のことを座式と呼び、日本の伝統的な生活様式を多くの欠点があると指摘している。欠点とは、生活するうえで不便があると考えており、特に立ったり座ったりと仕事の効率が悪いこと、衛生面でも問題があること、二重生活¹⁸⁾を引き起こしていることなどである。椅子式は、世界に通用している生活方法で、多くの長所があると考えていたようである。椅子式については、田邊淳吉もぜひとも椅子式に改めるべき¹⁹⁾であるとともに、椅子は人を支えるものであるから、形や構造が適当であるべき²⁰⁾と望んでいることがわかる。

それまでの日本女子大学寮では、畳敷きに床座が一般的であった。明桂寮以降の寮でも済美寮など畳敷きの寮はある。一方、明桂寮では、女中室のみが畳敷きとなっているが、「方針」にみられる通り、食

堂や個室など女中室以外のすべての部屋で椅子座式が採用されている。

成瀬が、設立当初から望んでいた洋風寮をつくることは、ベッドの導入も含めた椅子座式を徹底する空間づくりにつながった。当時、和洋折衷的な住居が多く、本学の他寮が和風寮であったことと対比して、椅子座式を徹底して作りこむこととなった。また同時に、女中室のみが畳敷きで床座式としてつくられたことは、意図的に学生の生活空間で椅子座式を試みたという実験的な空間づくりであったと捉えることができる。

(2) 家族本位

当時の多くの住宅は、客間が住居の重要な部分で、良好な方位に計画し、広い空間をあてていた。「方針」では、茶の間や居間など家族が主に生活をする部屋が、客間よりも位置が悪く、面積も狭いという不都合をなくすことが大事であると述べられている。客間を優先としたため、客がいる間は、家族は別室で静かに過ごすなど快適に過ごすことが出来なかった。つまり日当たりの良い場所にゆったりと家族のための日常生活空間を確保することが求められていた。

井上秀も家族本位に改めるべきであるなど同様のことを述べている²¹⁾。明桂寮では寮生が使用する食堂が北側玄関から廊下を挟んで近接しており、寮生や寮監にとって動線が短く生活しやすいように設計をされている²²⁾。食堂空間は、2本の八角柱を境に、ダイニング的な大空間とリビング的な小空間に分かれている²³⁾。写真1に示すように当時の写真を見ると、ダイニング的空間で食事をとり、リビング的空間で集まっている。ダイニング部分とリビング部分では、椅子の種類やテーブルのしつらえが異なり、性格の異なる場所として認識されていたことが推測される。写真1に写っている談笑している学生もリビング部分に着席している。このことは、他寮では見られない明桂寮の特徴であると考えられる。また、食堂は陽気な睦まじい気分を起こさせるように盆栽や花瓶等を飾るべき²⁴⁾と井上秀は考えており、写真1にも飾られた草花を確かめることができる。

つまり、明桂寮はこのように寮生が気持ちよく過ごせるコミュニティスペースの確保など、居住者のことを第一に考えた住宅であると考えられる。

一方、女中室は、4人で1部屋(9.7畳)である。寮生の居室や寮監の部屋(12畳)に比べると狭いが、



柱の奥は、窓の装飾性が高く、床も木材で、籐の椅子が置かれ、使われ方が異なることがわかる。なお、タゴールが来訪した際には、この部分に特別席が設えられており、ハイテーブル(イギリス等の大学寮で学長や主賓が座る特別な席)のような使われ方がしていた。

写真1：食堂の様子 1928(昭和3)年(成瀬記念館所蔵)

ベッドではなく、布団を敷いて寝ていたことを考えると都合の良い広さである。

(3) 衛生・防災

それまでの住宅は、生活における実用性よりも装飾を重視していたため、地震や家事、盗難に対する防備がない、寒さや暑さに対応できないなどの欠点があった。「方針」では、これからの住宅は、実用性を重視し、地震などの防備や衛生を考慮した住宅にするべきであると述べられている。

1) 衛生

はじめに、衛生面の特徴について厨房・洗濯室・食堂・居室にわけて考察する。

厨房について、写真2のような当時の写真を見ると立働式であったことがわかる。井上秀や田邊淳吉は、炊事室・洗濯室は、座式ではなく主婦や女中が立って動作を行うことができ、設備の配置を考慮するなど作業が便利に衛生上理想的な設備にするべき²⁵⁾と述べている。戦前期には厨房の改善に関して生活改善同盟会以外の場でも、設備計画や空間計画などさまざまな議論が行われている。その議論の中心となったものが、立働式の導入、衛生、利便性の3つの理念である²⁶⁾。立働式になることにより、衛生面の管理が行き届かなくなりがちであるが、明桂寮では、炊事室の掃除のためか、モルタル仕上げの床で、排水のための水切り勾配をしっかりとってある。



開放的な明るいキッチン。東、南、西面三面に窓があり、照明器具がまだ暗かった時代に、採光による明るさが確保でき、食品鮮度を確かめやすい環境である。また、椅子を使って調理をしていることも確認でき、立働式にすることによる負担軽減のための工夫をしていることがわかる。炊事は女中中心に行われたが、野菜を切ったり、盛り付けたりという作業は学生も一緒に行っていたという。

写真2：厨房の様子 1928（昭和3）年（成瀬記念館所蔵）

通風・採光については、南東側に一部張り出していることにより、通風・採光が確保できていると考えられる。当時の標準的な建築計画では、南向きの厨房はあまり見られないが、井上秀は、東南向きにして、日光が十分に入り、食品の状態や、食器の清潔な度合いを見分けるようにすべき²⁷⁾と述べている。1924（大正13）年に建てられた泉山寮は北側に食堂や厨房があるが、明桂寮は、南側に配置されている。明桂寮には井上秀が指摘し「方針」にも謳われている考え方が反映されていると考えられる。

食堂では、厨房同様、張り出していることにより、通風・採光が確保できている。採光について考察するため、佐藤功一の日影図²⁸⁾を参考に、9) 所載の図を重ね合わせ明桂寮での陽の当たり方についての図3を作成した。上述のとおり真北に対して平面の軸が30度傾いていることにより、朝日は差し込むが、夏の西日は入らない造りとなっている。また窓

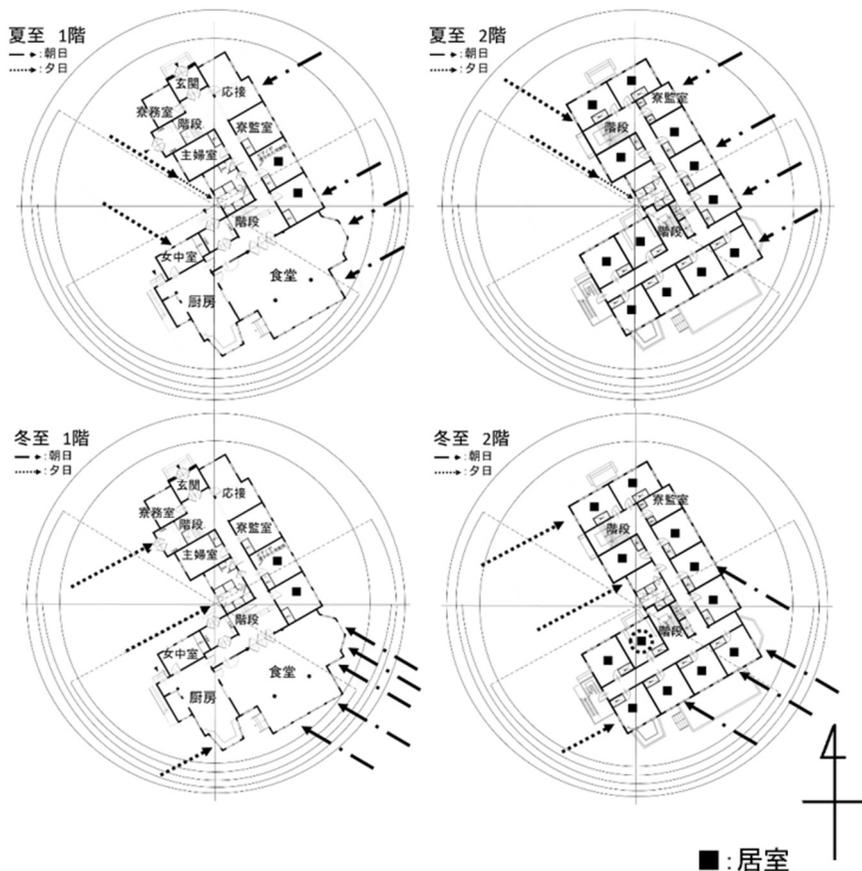


図3：採光のイメージ図（筆者作成）

の高さは、8尺（約2.4m）と床近くから天井近くまで壁一面に広がる極めて大きい窓を採用した。写真3をみると、井上秀や田邊淳吉が言うように、厨房と同様に洗濯室も立働式となっていることが分かる。図4のように洗濯室は地下の南側に配されているが、南東への傾斜地にあり、午前中の採光をふんだんに確保できる空間となっている。広さも十分あり、学生が作業しながらおしゃべりできるなど居心地の良い空間になっていたと推測できる。



南東側に窓があり、傾斜地の上に建つため眺望の良い場所で日々の洗濯を行うことができた。洗濯は干して乾かすためには午前中に行われていたものと考えられる。南東にある洗濯室は非常に快適な作業空間であったと考えられる。アイロン台を置く十分なスペース、水切りを兼ねた特別な排水設備など、洗濯室としての使いやすさも確認される。

写真3：洗濯室の様子 1928（昭和3）年（成瀬記念館所蔵）

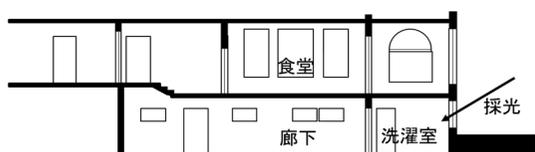


図4：採光イメージ図、地下・1階断面図（筆者作成）

寮生の居室についても、通風・採光が考慮されている。田邊淳吉は、換気について、各室には2か所の換気口を設けるべきである²⁹⁾と述べている。明桂寮の個室の窓には、図5に示すように換気口が設けられている。これらは、同時期に建設された同潤会には見られず、田邊の考えが反映されているのではないかと考えられる。窓には、引き違い窓の上部に回転窓がついており³⁰⁾、通風を意識したことが考えられる。採光についても、図3を見ると平面の軸線が真北から30度傾いていることより、多くの居室に朝日などの光が入る過ごしやすいつくりになって

いることがわかる。夏は全室にいずれかの時間に直射日光が入ることが確認できる。早朝の日差しは低いため、隣接する建物との関係から十分な採光が期待できない場合もあるが、明桂寮は傾斜地の上に建ち、(4)に後述するように、日光を遮る場所に建物を建てない工夫もあることから、窓からの光だけで充分採光が確保できていた。また冬至の日は最も採光条件が厳しい時期となるが、この時でも、南側階段室の西側にある一室を除いては、全室に短時間でも採光が期待できる設計となっている。

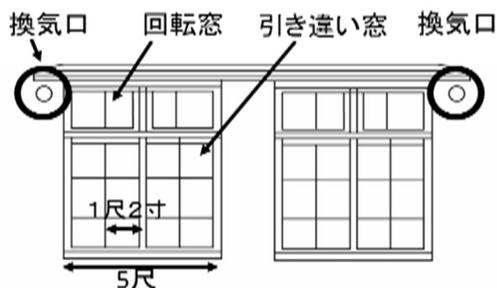


図5：換気口について（筆者作成）



左；アルコーブ



右；2階平面図

図6：アルコーブの様子

階段室は一般に暗い空間になりがちである。明桂寮には2つの階段空間がある。北側階段室（図6平面図のA）の階段室は、窓から陽が入り、景色も眺めることが出来る。また、南側階段室（図6平面図のB）には、アルコーブが設けられている。これが設けられていることの目的について、記述はされていないが、採光の工夫であると推測できる。南側階段室（図6 B）は陽の光が差し込まないような場所に位置しているが、階段空間にはアルコーブに反射して間接光が入ってくるため、明るい空間となる。また、廊下は、両端にある窓だけでなく階段に差し

込んだ光により明るくなる。各居室の扉はガラス入り扉であるため、廊下には居室からも採光を確保することが出来る。

2) 防火

明桂寮の設計が始まった2年前の1923(大正12)年に関東大震災が発災した。関東大震災で火事による被害が大きかったことを受け、建築分野においては防火や地震に対する対策が求められた。従来、鉄筋コンクリート造(以下RC造)は、公共建築物などが中心で使われる構造であったが、関東大震災の復興住宅では積極的に導入され始めた。明桂寮はそれと同時期につくられた住居系RC造であり、防火や地震を意識した先進的な取り組みであるといえる。

平面図をみると、厨房がメタルラス貼りモルタル塗りである³¹⁾ことがわかる。メタルラス貼りモルタル塗りは通常、木造建築で使用される。しかしRC造そのものが防火対策となるため、RC造ではあまり使用されないが、明桂寮では、より防火対策を進めるため厨房部分にのみ使用されたのではないかと考えられる。RC造の住居の先行建築物が少なかったことによる、丁寧な対応ともいえよう。

また、窓の枠が木ではなく鉄であるなど細部まで防火を意識した作りになっていると考えられる。

3) 防犯

「方針」では、防犯についても述べられている。明桂寮の窓の棧は図7に示すように1尺5寸(約45cm)の間隔³²⁾で入っており、泥棒防止など防犯の面も重視していたと考えられる。明桂寮を設計した佐藤功一の自邸でも、鉄骨の棧が入っていることにより、ガラスが割れても泥棒が入ることがないと述べている³³⁾。

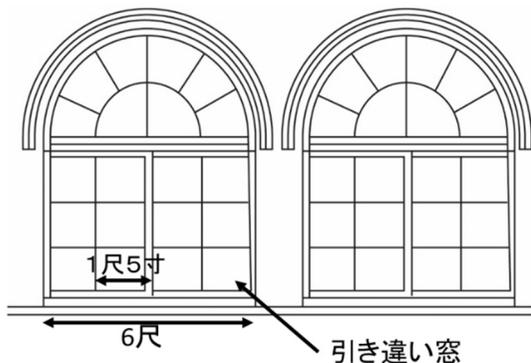


図7：食堂の窓(筆者作成)

(4) 庭園

それまでの庭園は日本庭園のように鑑賞を目的としていたため、家族が日常的に利用するつくりとはなっていなかった。「方針」では、これからの住宅は、実用性を重視した庭園であるべきであると述べている。ここで言う実用的には、大きく2種類の事柄が説明されている。一つは、通風・採光の確保のために空地としての必要性である。明桂寮は、南斜面の上に立地していたため、採光は確保しやすいものの、図3に示すように全室にどの季節でも採光を得ようとすると、隣接して建物が建たないようにすることは必須であった。

さらに「方針」では、庭園は家族全体が利用することが大事であり、住宅の中心であるリビング的空間に面する部分を庭園の中心にして、主婦が菜園を行うことや子供が砂場のように遊ぶことが出来るなど、家族が利用できる庭園、屋外の居室のように捉えるべきであると記載されている。菜園を営むことで、主婦の趣味であるだけでなく経済的にも利用することが出来る。

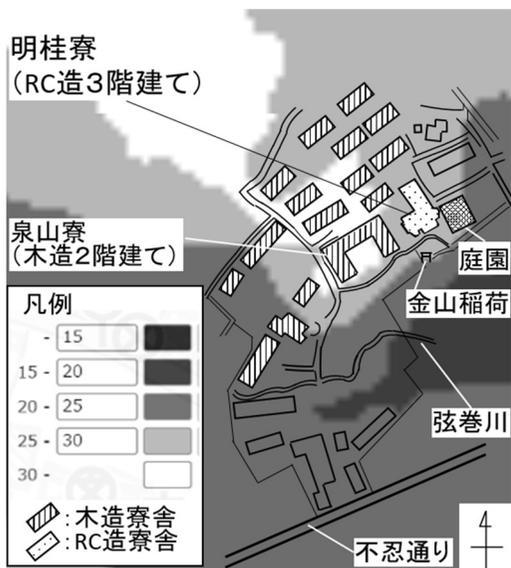
同様のことは、井上秀や本校家政学部で庭園の講義を行っていた田村剛も述べている³⁴⁾。他にも田村は、庭園は火災・震災・暴風に対しても有効であると述べており、庭園の重要性を説いていることがわかる。ただ、建坪の5~6倍の庭園があることが理想であるが、日本では不可能であり、採光通風のために必要最低限の面積をとることで満足するしかないと述べている。

明桂寮の東側にある庭園は、「龍居先生ご設計のお庭」とのことで、写真4に示す正方形の庭が寮の菜



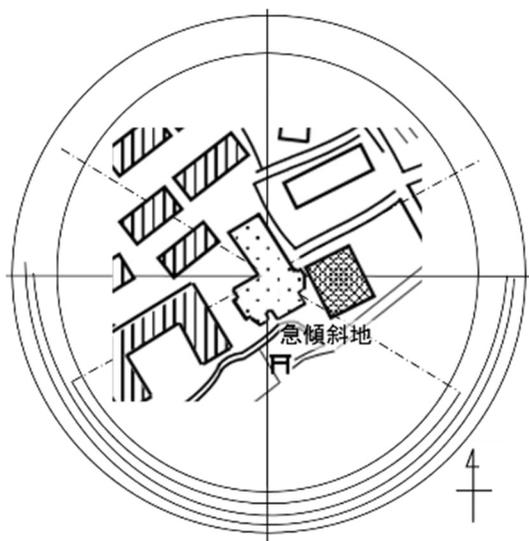
成瀬記念館所蔵の写真によると、当該部分の写真の説明として「龍居先生ご設計のお庭」とある。ここでの「龍居先生」とは、本校国文学部で日本文化史を講義していた、造園家である龍居松之助である可能性がある。

写真4：1928(昭和3)年の庭園の様子(寮内より撮影か。成瀬記念館所蔵)



(国土地理院色別標高図に日本女子大学寄宿舎増築設計図記載の情報を加え筆者作成)

図8：明桂寮周囲の傾斜の様子



(佐藤功一の日影図に図8の情報を重ねた)

図9：明桂寮周囲の採光イメージ図

園や記念撮影に使用するなど観賞用ではなく、実際に使用されていたことがわかる。また、採光のために重要となる東側に、建物などが建ち、東側からの採光しか期待できない寮舎内の部屋に早朝の陽が当たらなくなることを防ぐ役割も果たす。庭園があることで、通風や採光を確保することも考えていたの

ではないだろうか。明桂寮の庭の面積は、田村が理想とする5～6倍には届かないが、図8や図9に示すように南側を斜面とする傾斜地に建つことから、冬至の日であっても寮の南東にこのような庭があったことによって、東側の居室であれば一番北側の部屋でも採光が期待できた。午後の日差しを期待できる西側については、木造の泉山寮があったため、逆L字型にして少し距離をとってはいるものの、冬の午後は十分な採光の得られない部屋もあったと考えられる。しかしその後泉山寮は解体されたため、結果的には1993(平成5)年に休寮するまでは、西側の部屋にも十分な採光が得られていた。

(5) 家具

従来の家具は、実用性よりも見た目を重視した家具が使用されていた。「方針」では、家具について、従来のものに比べて一層実用的なものであることを求めている。つまり、骨董品のような装飾品として使用するのではなく使用目的に適したもので、簡単に壊れないものであることが条件である。しかし、家具の足を太くするなど非常に頑丈にすると、美しくないだけでなく、重くなり不便になってしまうため、工夫が必要になる。

井上秀も、日常の家具は壊れにくく安価であるものにすべきと述べている³⁶⁾。田邊淳吉も、日本従来の装飾は背景の役割をするだけで、これからの住宅においては実用から離れていると指摘している³⁷⁾。

明桂寮の個室には、机・椅子・本棚が置かれている。明桂寮が建設されたころと推察される写真5を見ると、装飾のないシンプルな造りとなっている。



写真5：明桂寮居室の様子，昭和初年（成瀬記念館所蔵）

また、明桂寮の部屋では、ベッドが使用されている。ベッドの使用についても、家事労働軽減の観点から奨めているものが多かった³⁸⁾。創立当初には、折り畳みベッドを使用することで、4人が1部屋で生活することが出来ていた。つまり、骨董品ではなく実用性を一番に考えた家具を使用していたことがわかる。現在、明桂寮の中に残されている家具も同様にシンプルなものである。

(6) 共同住宅・田園都市

「方針」では、これまでの和風戸建て住宅は、経済的・衛生的に欠点が多い住宅となっているだけでなく、今後の人口増加が予想されるため、適切な共同住宅が推奨されると述べられている。ここでの共同住宅の利点としては、建築費が節減でき、衛生設備が安価で設置しやすく、広い庭園が確保でき、安心で安全な家屋となるように計画できるとしている。

明桂寮は、それまでの木造戸建て住宅で、20~30名で暮らす大き目の大家族を意識して建てられていた寮とは異なり、約100人ものが共同で生活しているという点で、明らかに家族の規模を超えた住まいであり、「方針」で示す共同住宅に相当するものである。震災復興の取り組みとして建てられた同潤会アパートメントは、日本で共同住宅が本格的に普及する端緒となったが、同時期に建てられた明桂寮は、従来の日本女子大学の学寮の規模から大きく形態を変化させた試みである。なお、本学でその後建てられた寮の中には、建物としては集合住宅形式であっても、寮の組織を小さくして運営している点は明桂寮と異なる。フロアごとに異なるものとしていた紫峰寮・精華寮・新泉寮、また現在もある潜心寮・泉山寮は寮舎としては一棟で1名称であるもののフロアごとに談話室があり学生の連帯意識としてはフロアごとの結びつきが強い形式になる等、家族規模が意識されている。これらの寮で時折行われている部屋替えもフロア内で完結させているものの、明桂寮では寮舎全体での部屋替えがあったという。明桂寮という一つの大きな共同生活組織の運営を試みる、当時の新しい生活を作り上げようという中での実験的な試みであったとも言える。

また、寮地区がある金山村は、当時の東京市外であり、畑など自然に親しむことが出来る³⁹⁾など、寮地区自体が田園都市の中にあるという概念に近い形態であったと言える。また明桂寮建設時の詳細な土

地利用については検討課題であるが、斜面地は雑木林的空間が残り、緑豊かな空間であった。

4. 結論

本稿では、日本の住宅が改善されるプロセスにおいて、重要な役割を果たした、生活改善同盟会の住宅改善調査会が示した「住宅改善の方針」の6項目と、明桂寮の特徴とを整理した。「起居方式を椅子座式にする」、「接客本位を家族本位とする」、「実用本位の庭園」、「衛生・防災を考慮する」、「家具の実用性を考慮する」、「共同住宅・田園都市の施設を奨励する」の6項目すべてについて、何らかの形で実現していることが確かめられた。

成瀬は、創立にあたって、日本の家庭生活を改善することを意識しており、そのために家政学部を設立した。また寮地区でできるだけ多くの学生が生活をしながら、学びと研究の機会を得ることを、推奨していた。いわばリビング・ラボラトリーを実現していたのである。設立趣意書から記載されていた洋風寮の建設は、大学設立から四半世紀を経て実現した。ようやく実現した画期的な新しい寮には、当時の日本の住宅を変えるための検討を行っていた中心的メンバーが本学教員であったこともあり、積極的に新しい住居形態が導入されたものである。日本女子大学が、実践的に新たな住まいの形を示したことは、大学が社会の変革の一翼を担う実践場所であり、意義深いものであった。

付記：本研究は、総合研究所研究課題67による研究を含むものである。

注釈

- 1) 中村政雄編：日本女子大学校四拾年史、日本女子大学校、426 (1941)
- 2) 成瀬仁蔵述、日本女子大学成瀬記念館編：実践倫理講話筆記、日本女子大学成瀬記念館 (2001)
- 3) 石田雅美、藪下美雪、関村啓太、葉袋奈美子：成瀬仁蔵が学生寮に期待した役割を『実践倫理講話筆記』より探る、日本建築学会学術講演梗概集 (2019)
- 4) 日本女子大学学寮100年研究会：女子高等教育における学寮、ドメス出版、112 (2007)
- 5) 中廊下式住宅は、部屋の通り抜けの不都合を解決することを目的として導入された。中廊下に

- より家族の生活から女中の行動が分離されるようになり、家族のプライバシーに大きな影響を与えた。(内田青蔵：日本の近代住宅，鹿島出版会，57 (1992)；平井聖：日本住宅の歴史，学芸出版社，95 (1992))
- 6) 木村徳国：日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究，北海道大学工学部研究報告，19，255-285 (1958-1959)
 - 7) 内田青蔵：日本の近代住宅，鹿島出版会 (1992)
 - 8) 須崎文代：台所見聞録，LIXIL 出版 (2019)
 - 9) 中野夏貴：佐藤功一による寮建築の研究—日本女子大学の明桂寮を対象として—，日本女子大学卒業論文，2014
 - 10) 中村政雄編：日本女子大学校四拾年史，日本女子大学校，442 (1941)
 - 11) 家庭週報 904 号，金山の新寮，昭和 2 年 9 月 16 日付 5 面
 - 12) 家庭週報 978 号，タゴール詩聖を迎ふる夕，昭和 4 年 4 月 5 日付 2 面
家庭週報 1311 号，満州国錦州省日本教育視察団来校，昭和 11 年 5 月 29 日付 2 面
 - 13) 家庭週報 816 号，女子総合大学の開設に就て，大正 14 年 11 月 13 日付 1～2 面，麻生正蔵
 - 14) 住友和子編集室：MADORI (日本人と住まい 6 「間取り」)，リビング・デザインセンター，38 (2001)
 - 15) 生活改善同盟会編：住宅改善の方針，生活改善同盟会 (1920)
 - 16) 井上秀：最新家事提要，文光社，240 (1926)
 - 17) 内田青蔵：日本の近代住宅，鹿島出版会，96 (1992)
 - 18) 二重生活とは，社会生活の場である会社では機能的な洋服が定着していたが，家庭では，使い慣れた和服で生活するというように和服と洋服を使い分ける生活をしてきた。このような和と洋の混在が衣・食・住の生活全体で見られていた。住の分野では，和室と洋室が二種類あり，同じような機能の家具が和様二種類あることが不経済であると考えられたため，洋風に統一するべきであると考えられていた。(内田青蔵：日本の近代住宅，鹿島出版会，84 (1992))
 - 19) 田邊淳吉：住宅の研究
(女子大学講義発行所：女子大学講義，14，女子大学講義発行所，112 (1931) 所収)
 - 20) 田邊淳吉：住宅の研究
(女子大学講義発行所：女子大学講義，18，女子大学講義発行所，181 (1931) 所収)
 - 21) 井上秀：最新家事提要，文光社，240 (1926)
 - 22) 台所と食堂を行き来せずに食事を運ぶことができる工夫や，大空間と小空間に分けられている点など。
 - 23) 鈴木賢次・水井七奈子：日本女子大学における佐藤功一設計の建築に関する考察—その 3・明桂寮—，日本女子大学紀要家政学部，55 (2008)
 - 24) 井上秀：最新家事提要，文光社，251 (1926)
 - 25) 女子大学講義発行所：女子大学講義，18，女子大学講義発行所，166-168 (1932)
井上秀：最新家事提要，文光社，154 (1937)
 - 26) 須崎文代：台所見聞録，LIXIL 出版，58-69 (2019)
 - 27) 井上秀：最新家事提要，文光社，246 (1926)
 - 28) 佐藤功一，住宅建築衛生篇，早稲田大学出版部，43-46 (1931)
 - 29) 女子大学講義発行所：女子大学講義，18，女子大学講義発行所，170 (1932)
 - 30) 成瀬記念館所蔵写真，成瀬記念館所蔵図面
 - 31) 日本建築学会編：構造用教材 (改訂第三版)，日本建築学会，88 (2014)
成瀬記念館所蔵図面
 - 32) 成瀬記念館所蔵図面
 - 33) 朝日新聞，建築家のお宅訪問，1933 年 7 月 12 日付 5 面
 - 34) 田村剛：庭園生活
(女子大学講義発行所：女子大学講義，1，女子大学講義発行所，14 (1930) 所収)
 - 35) 生活改善同盟会：住宅家具の改善，生活改善同盟会，133 (1924)
 - 36) 井上秀：最新家事提要，文光社，202 (1937)
 - 37) 田邊淳吉：住宅の研究
(女子大学講義発行所：女子大学講義，15，女子大学講義発行所，117 (1931) 所収)
 - 38) 木村徳国：大正時代の住宅改良，日本建築学会論文報告集，60，(1958)
 - 39) 中村政雄編：日本女子大学校四拾年史，日本女子大学校，432 (1941)